プシュケリア

鈴本恭一

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生命力を人々に与えるプシュケリア一門。

その師匠が悪魔を拾う。

そのときから、なにかが狂い初めていく。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 4
第3話 …… 10
第4話 …… 17
第5話 …… 29
第6話 …… 36
第7話 …… 44
第8話 …… 59

第1話

「師よ、あなたは狂われたのか」
「弟子達よ。お前達の見るものが、私には見えない。私の見るものが、お前達には見えない」

師は言われた。

「私はプシュケリアを見ている。プシュケリアの困窮の喘ぎを聞いている。そして、それはあの娘も同じなのだ」

＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊＊＊　＊

師が悪魔を拾ってきた。
いつものように列を成す病人たちに師がプシュケリアの施しを与えていると、ひとりの若者が血相を変えて駆け込んできた。
「出ました！　あの餓鬼です！　例の人食いの！」
師の家の前に並んだ人々が驚きにざわめく中、師は顔色ひとつ変えず、その若者に尋ねた。

「その者は今、どこに？」
「霊廟裏の空き家です！　あいつが街に入ろうとしたんで、俺の仲間がそこまで追い込みました！」
「では、私が行くまで見張っていなさい。見張るだけでいい。決して手を出さないよう」

師にそう言われると、若者は水を何杯か急いで飲んでまた戻っていった。師は並んだ病人達に、
「私は行かなくてはなりません。あとは弟子達に」

と言ってそのまま出掛けていった。しかし師は「アロトロバ」と私の名を呼び、

「お前は私と一緒に来なさい」

「はい、先生」

こうして私達は街の北にある霊廟へ赴いた。

街に来る旅人や商人が奇妙な輩に襲われ始めたのは、ここ一ヶ月ほどのことだ。

街と街の間に広がる荒野や砂漠で盗賊や物盗りの類が出るのは珍しくないが、例の被害に遭った者は何も盗まれず、また外傷もなく、ただひどく衰弱しているのだった。

そういった者はたいてい師のもとに運ばれ、師はその素晴らしきプシュケリアで彼らを癒す。そうして回復した者達が言うには、子供のような小さな何者かに襲い掛かられたらしい。

街の長老や僧侶達は砂漠の悪魔、人食いの仲間に違いないと断じた。

血肉ではなく人間の生命力そのものを貪ることの出来る魔物で、子供の外見をし、常に飢えているのだそうだ。

被害のあった場所は日に日に街に近づいていた。街では警戒を強め、よそから来た子供がいればすぐ街の住民に報せることにした。知らない子供がいればすぐに分かる。

そして数日前、街の城壁近くをうろうろする知らない顔の子供を見た、という情報があった。早速捕まえて縛り上げようとした若者衆を、師が制した。

聞けばその人食いの悪魔は触れるだけで人間を死に至らしめるという。その危険性のため、街に入った場合、まず我が師がことにあたると彼は自ら言った。

反対者は多かったが、師は徳をもって根気強く説得した。反対した者の中には私と同じ弟子たちもいた。

師は日々プシュケリアをもって多くの病人を救い、富める者も貧しい者も隔てなく癒すかけがえのない人間だった。そんな師が危地に赴くことはない、と弟子達は訴えた。

しかし師は首を横に振った。

「かけがえのあるなしを決められるのは、天上に坐す至高の方以外にない」

と師は言われた。

「天より授けられた力を使う機会を自ら失うことこそ、あの方への裏切りに他ならない」

師の穏やかだが力強い決心を前に、弟子達はそれ以上なにも言えなかった。

第2話

私の師は豊かなプシュケリアを持っている。湧き出る井戸の水のように、師はそのプシュケリアで人々を癒した。

プシュケリアはあらゆるものに宿っている。風にも岩にも土にも水にも。

天の神が万物を創造なされたその聖なる跡だと、我が師は言われた。

万物の中でも生き物のプシュケリアは格別大きい。それは生き物の魂がプシュケリアで動いているからだ。

魂だけではない。肉体もプシュケリアによって生命力を維持している。

強いプシュケリアがあれば強い生命になり、弱ければ様々な病症を引き起こす。

師は特別プシュケリアが大きかった。プシュケリアを実感し、理解し、それを他人に分け与えるほどに。

プシュケリアを学ぶことは造物主の御業を学ぶことだと、かつて既に師のもとに弟子入りしていた友人から言われたことがある。

私は彼の勧めで弟子入りし――その友人は私の弟子入り後にほどなくして別の場所へ修行の旅に出たが――、プシュケリア一門のひとりとなった。

私は師と共に霊廟裏の空き家前にやってきた。

以前は何某という商人の住家であったが、住人がいっせいに病死して以来、誰も住んでいない。

異国の祭具を好んで集め、家の中に異教の祭壇を設けていたという噂もあった。

二階建てのその家屋は無秩序に蔓草がはびこり、窓という窓が戸板で封印されている。

壁の煉瓦はぼろぼろに損なわれ、貧弱な門柱が今にも崩れそうなほ

ど罅割れている。
その陰鬱な廃墟から発散される空気が、今日はさらに荒々しく波打っている。
廃屋の前には師のもとに駆け込んできた例の若者とその仲間達が数人いた。
彼らの表情は不安と怯えでひどく青ざめ、浮き足立っているのが分かる。我々に気付くと若者達は慌てて走り寄ってきた。
「先生！　大変です！　仲間が帰ってこないんです！」
「落ち着きなさい。何があった？」
若者達によると、彼らの仲間のひとりが血気も盛んに悪魔退治と意気込み、空き家の中へ乗り込んでしまったらしい。
師の伝言を受けた若者が仲間のもとに戻るより前の出来事であり、そして乗り込んだ者はまだ廃屋から戻ってこないという。
「分かった。ではこれから私と弟子が彼を探してくる。また私達が戻らなかったとしても、あなたがたは決して探しに来てはいけない」
師が若者達に言った。若者達はうろたえ、
「し、しかし先生達に何かあったら…」
「私が戻らずとも、この弟子は戻る。その後のことは彼に訊けばいい」
師の言われたことに、今度は私がうろたえてしまった。
どういう意味なのか私も若者達も分かりかねたのだ。
だが師はそれにかまわず、乱れのない歩みで空き家の中に進んでいった。私は慌ててそれについていく。
玄関を潜り、しなびれた貧弱な雑草が生い茂る中庭に出た。
敷地に足を踏み入れると、私は強烈な悪寒を覚えた。
全身を何かで撫でられたような感覚。澱み濁った空気の中を、目に

見えない魔手が泳いでいる。
師の温かなプシュケリアとは真逆の、暗黒色の生気が漂っていた。
「先生…何かいます」
「ああ」
師は頷かれた。その視線は、中庭に面した戸口に注がれている。
屋内に通じる戸口はほとんどが窓と同様に閉め切られていたが、ただひとつだけ、戸板が朽ちて外れかけた入り口があった。
「アロトロバ、来なさい」
我々はその崩れかけた戸口から、家の中に入っていく。
家の中は濃密な臭気と陰気に満ちていた。
入り口からのか細い光では、中はほとんど見渡せない。長年人の手を離れた建物特有の、塵埃と腐敗の臭い。
それらの悪臭をねじふせて、総毛立つほどの鋭い冷気が暗闇の空間を支配していた。
その見えない冷気を察知した途端、私の体から力が急に入らなくなっていく。
「…!」
自分の重みに堪えられず、私は思わず膝をついてしまった。息が上がる。体が必死に活力をこしらえて全身に送り込んでいるというのに、その活力が誰かに奪い取られていた。私の体を動かすための力がどんどん私から逃げていく。ついに膝だけでなく手まで付いて、その場にうずくまってしまった。
「先生!」
「大丈夫。落ち着くのだ」
師は平常と変わらぬ穏やかさで、私の肩に手を置いた。肩から淡く

温かなものがじんわりと流れ込んでくるのが分かった。師のプシュケリアだ。奪われた私の活力の代わりに、師の力が私を動かしてくれる。

活力の源である私のプシュケリアも、師のプシュケリアの助けを得て活性化していく。私は立ち上がり、全身に力が満ちていくのを感じた。いまや奪われる力よりも多くの力を私のプシュケリアは生み出すことが出来た。

これが師のプシュケリアの力だった。悪霊の巣窟のようなこの屋敷の中でさえ、師の輝きが褪せることはなかった。

「ありがとうございます、先生」

私は師に勇気づけられ、自ら進み始める。師は頷き、同じく前へ進んだ。

そのときだった。

「――そこで止まれ」

暗闇の中から、声がした。

私は暗黒が喋ったような温度のないその声音に、体を強張らせる。我々は足を止めた。声が続く。

「そこに転がってる間抜けを連れて、ここからとっとと消え失せろ」

悪意と敵意、そして若干の疲労を含んだその声が言う。

師は言葉を返した。

「今から明かりを点ける。かまわないか？」

しばし沈黙があってから、

「…好きにしろ」

と見えない相手が応える。

師は懐から蝋燭と燭台を取り出し、灯をつくる。火種は要らない。師は指先に触れるだけで蝋燭へ火を付けることが出来た。

師が灯りをかざすと、仄かに家の中の様子が分かってくる。かつては厨だったのか、器や皿、包丁などが壊れたまま散乱していた。

師はさらに奥を照らす。

部屋の奥に設けられた竈の前に、ひとりの若者が倒れている。見知った横顔だった。例の乗り込んでいった者に間違いない。

「先生…!」

私の言葉に師は頷き、

「彼に触れ、彼を癒すことを許して欲しい」

と言った。

「お前は医者か?」

「そうだ」

「…やるならさっさとやれ」

師は恐れるものなどないという動きで若者のもとまで歩み寄った。私も師に続く。歩を進めるごとに、あの忌まわしい魔力のような気配が強くなる。まだ蝋燭の火が届かぬ部屋の奥隅に、何かがいるのだ。

師は若者の傍らで身を屈め、彼の呼吸と脈を確かめた。数拍の間を置いた後、師は私を見て頷く。その表情から、若者にはまだ息があることが分かった。師は横たわる若者に手を置き、先ほど私へ施したのと同じようにプシュケリアを分け与え始めた。

プシュケリアは目には見えない。ただ感じるだけだ。

若者の弱々しかった呼吸が徐々にはっきりとし、指先や目蓋が動き始めた。それを見て初めて、彼のプシュケリアの働きを師が蘇らせたのだと分かる。

「アロトロバ、彼を表の者達のところへ運んでやりなさい」

若者の弱っていたプシュケリアが自らを律することが出来るまで回復すると、師は私に言った。

「安静にさせ、水をよく飲ませるよう伝えなさい」

「はい。しかし、先生は？」

「私はまだ話があるので残る」

師は悪魔と戦うつもりなのだ。私は悟った。ならば私も残ります、と言おうとすると、

「彼を助けるのだ、アロトロバ。プシュケリアの徒であるならば」

師は強い言葉で私に言う。その通りだった。プシュケリアが傷ついた者を救うのだと師は常々言っていた。その師を置いてでも。

なお逡巡する私に、師は珍しく小さく笑った。

「アロトロバ。お前に命じよう。若者を引き渡した後、戻って私の証人になりなさい」

師の言葉の意味が、やはり分からなかった。しかし師は私に命じられた。使命を与えた。若者を連れ戻し、ここに戻ってくることを。

私はただちにそれを実行した。若者の屈強な体をどうにか支えて引き上げ、光の差し込む入り口に向かう。光と闇の境目に立ったとき、私は振り返って師を見やった。

師は私を見ていなかった。じっと、闇の奥をすがめていた。

第3話

私が急いで戻ってきたときも、師は変わらず闇の中に佇んでいた。
息を荒げて飛び込んできた私は、師が時間の中で凍結していたのではないかと思ったが、もちろん違う。止まるどこか、師は前に進んでいた。
師の持つ燭台が、部屋のさらに奥を照らしている。
目が闇に慣れてくるにつれ、私も師の見ているものが分かった。蝋燭の淡い火が、部屋の角をうっすらと浮かび上がらしている。
そこに、ぼろを纏った小さな者がいる。
頭巾も上衣もぼろぼろに擦り切れていて、もとがどのような服だったのか分からない。薄汚い頭巾を目深に被っているため、人相も分からなかった。
小さく縮こまっている姿勢のせいで、ただの千切れた布の塊に間違いそうになる。
だが、確かに人だった。
人の形をした悪鬼かもしれないが。

「――連れが戻ったぞ。話とやらをしてみせろ」

布きれがもぞもぞと蠢いて、喋る。それが言葉を作るたびに、私の魂が怯えてしまう。プシュケリアの力を奪ったのは、間違いなくこの声の主だった。

「その前に、お前の顔が見たい」

師は言った。

「人間を喰うやつが物珍しいか」

嘲笑が返る。師は首を横に振った。

「お前と話がしたい。出来るなら、顔を合わせて。お前が望まないのなら、無理にとは言わない」

その声には、聞き間違いかと思われるほどの思い遣りが溢れていた。私は驚く。なぜならその声音は、師のもとに訪れる病人達に師が接するときと全く同じ声だからだ。

「見たいなら、もっと近くに寄ればいい」

「近付いていいのか?」

「さっきの馬鹿みたいになってもいいのならな」

せせら笑いが闇に波紋を作る。あの冷え冷えとした、風ではない風が私の身を吹き抜けた。プシュケリアが弱まっていく。

悪魔が本性を現したのだ。体を巡る熱い湯が水にされてしまうような感覚に、私はここが危地なのだと改めて悟った。

だが師は微塵も怯まなかった。彼はさらに悪魔に近付き、丁寧な仕草で膝を折る。

師は目線の高さを悪魔に合わせ、ゆっくりと手を差し伸べ、言った。

「私を食べなさい」

その言葉には、少しの焦りも苦みもなかった。

何を言われるのか、と私は驚く。師は悪魔の魔術に苦しむ私のためにそのようなことを言われたのか、と私は激しく慌てた。だがその私を、師は片手で制する。

「アロトロバ、お前は証人だ」

「な、なんのです?」

「私のプシュケリアが力及ばず、この者を癒す前に、または癒した後に私が死んでも、この者が殺したのではない。私がうぬぼれただけのことなのだ」

師はこともなげに言う。しかし私はそうはいかなかった。師のやろうとしていることに、慌てぬ弟子がいるだろうか。

「先生…先生はこの悪魔に、プシュケリアを分け与えようと言うのですか！」

「そうだ」

師はいつものように穏やかに、しかし揺るがぬ岩のように私に言う。

「この者のプシュケリアは弱っている。他の者のプシュケリアを奪わねばならぬほどに」

プシュケリアが弱っている者を、弱っていないプシュケリアの者が助ける。

それがプシュケリア一門の教えだった。

師の教えだった。

だが私は「お考え直しください！」と訴えた。

「命を失うほどのプシュケリアを与えてはいけないと、あれほど強く私達に言ったではないですか！　死者を救うために死者を出してはいけないと、先生が教えて下さったのではありませんか！」

「そうだ。私が言った」

師は振り返らないまま、私に告げる。

「心配はいらない。私のプシュケリアならば、この者のプシュケリアを救ってみせる」

「……矛盾してるな、先生よ」

堂々と言い放つ師に言葉を突き刺したのは、私ではなく悪魔だった。

「力が足りるなら、どうして弟子にあんな証言を取らせた？　力が足りないなら、どうして弟子にそんな教えをした？」

私はまた別の意味で驚いてしまう。悪魔の声は魔物然とした闇の声音から、深慮する哲学者のような口調になっていた。

師は悪魔に対し、真摯に頷いて応える。

「私が愚かであることを弟子に明かしてでも、お前を救うつもりだからだ」

その応えに、私ははっと気付く。

もし私を呼び戻さず、師だけが悪魔に挑み、死んでしまった場合、残された弟子達は悪魔が師を殺したと思うだろう。

それはまだ良い。良くはないが、自ら危地に身を晒した師を嘲笑う者などいない。

だが私は師から、悪魔が殺したのではないと皆に言うよう命じられている。そうなれば、自らの力量を見誤った愚昧の輩と嘲る者も出るだろう。そうなれば、師の築き上げてきた徳を貶めかねない。

かまわないのだ、と師は言っている。

もし私を呼び戻さず、師が悪魔を調伏した場合。師は悪魔などに敗れはしないと確信していたのだ、と弟子達は思う。だが私は師が、もしかしたら死ぬかもしれぬと思っていることを知っている。

師の教えを師自身が破っているのだ。私から他の弟子達に広がり、

ついには糾弾される立場になるかもしれない。
どちらにせよ、私をこの場に呼び戻す利点など何もなかった。師を窮地に追いやるだけだった。

かまわないのだ、と師は言っている。

そんな師に、悪魔は問うた。

「私はお前を殺し、そこの弟子を殺し、街の人間を気が済むまで殺すかもしれないぞ？」
「そうかもしれない」
「仮にお前の命と引き替えにこの街を去ると約束しようと、それは無意味だ。死んだ後のことを、死んだお前が咎めることは出来ない」
「私が死んだ後、お前を咎めるのは私ではない」
「なら誰だ。誰が私を咎める」

天の神だ、と私は思った。しかし師は違う言葉を口にした。

「お前だ、娘」

師の手にある光が、ぼろ布の奥を照らし出す。
頭巾の下、砂塵と土埃にひどく汚された小さな顔。火打ち石から飛び散る火花のような眼光。そして黒々とした長い髪が頭巾からはみ出ている。
悪魔は確かに、年端もいかない少女の姿をしていた。
少女の顔をした悪魔が、憎々しく歪んだ表情で師を睨んでいる。

「なんだって？」
「私が死んでも、お前がお前を咎める。そして私が死ぬ前から――私と出会う前から――既にお前はお前を咎めている」

ごぽり、と空気の濁る音が聞こえた。

無論実際に音などしていないのだが、部屋の中のあの毒々しい障気りが急激に濃度を高めていく。体がずっしりと重くなり、私はその場で頽れてしまう。プシュケリアが正常な働きを出来ず悲鳴を上げた。

禍々しさを悪化させていく闇の中、平然と手を差し伸べる師へ魔物が吐き捨てるように言う。

「お前に私の何が何が分かる」

「お前のプシュケリアが分かる」

「なんだ、それは」

「他の者には見えない、お前には見えているものだ」

師の言葉に、悪魔は口をつぐむ。師は目を伏せ、告げた。私が聞いたこともない、どうしようもなく淋しい声で。

「……そして、それは私も同じなのだ。私だけが、見えるのだ」

悪魔が目を僅かに見開かせる。

師は頷いた。悪魔が唇を噛む。言葉以外の何かを交わし合っていた。

私は力が入らぬまま、声が出せぬまま、叫んだ。

師よ、なぜそんなことを言われるのか。プシュケリアは人の目には見えないと、私達に教えて下さったではないか。

師よ、なぜ悪魔には、私達と異なることばかり口にするのですか。

本当のあなたはどちらなのですか。

「娘よ。もう一度言う」

悪魔の結界は私の声を師に届かせない。私のプシュケリアでは、こ

の悪夢を切り裂けない。師は私に一瞥もせず、悪魔へ言った。

「私を食べなさい」

こうして、師は悪魔を拾われた。

それから、ゆっくりと全てがおかしくなっていった。

第４話

師が悪魔に取り憑かれた娘を祓い清めた。
街はこの話題で溢れかえった。
弟子達のもとに無事に帰った師は、ぼろの頭巾を取り払った娘を連れて告げた。

「今からこの娘は私に仕える者となった」

こうして娘の姿をした悪魔は、師の邸の召使いになった。
師の勇名はさらに高まり、街の長老や僧侶達も師を讃えた。
弟子達は喜びと誇りに顔を輝かせる。
街の人間達は師が清めた悪魔の娘を見ようと押しかけた。
師はそれらの興奮に流されず、常と変わらぬ悠然とした表情で過ごしていた。

私だけが、良質な昂揚や不動の平常心を抱けなかった。

悪魔は体を洗われ、新しい服を与えられた。
ひどく痩せ細った体だったが、陽の下で見れば小さな顔は繊細に整っている。
幼さから来る丸みは少なく、切れ長の瞳には薄氷のような危うい魅力があった。
加減を僅かに間違えただけで台無しになりそうな、完璧な目や口の配置。

その悪魔は美しかった。

「家族はどうしたのだ？」

と長老が師を労いながら、悪魔に尋ねたことがある。きちんと刺繍のされた頭巾と上衣を纏った娘は、

「みんな流行病で村ごと死にました。残った者も野盗に遭って散り散りに。その後のことは、よく覚えていません」

気付けばそちらの先生に助けて頂いた次第です、と恭しく応えた。長老を始めとした街の住民たちは同情し、当分は師のもとに身を寄せることを許した。

婚姻できる齢になれば、誰かを紹介することも約束した。

実際、悪魔はよく働いた。

飯の煮炊きは勿論、掃除、洗濯、病人達への応対、家畜の世話…。それらを愛想が良いとは言えないが、黙々とこなしていた。

ただ、同じ召使いとして働く女達は彼女のことを不気味に思っているのか、事務的な遣り取り以外は出来るだけ悪魔の娘に近付かないようにしていた。

どうしてなのかを私は訊いてみた。

曰く、

「あの子の隣で寝ると、次の日必ず体の調子が悪くなる」

「あの子は食事をほとんど摂らない。少しの水とパンくずしか食べていない」

「先生があの子を連れて出かけると、家の中の雰囲気が急に明るくなる。逆にあの子が戻ってくると空気が淀む」

「あの子が来て以来、猫や鳥が家に全く寄りつかなくなった」

等々。

彼女らは私が抱く感覚と同じものを、あの娘から感じているのだ。
そうして、召使いの女達は何か理由を付けて少しずつ辞めていった。

召使いの数が減ったので、悪魔の働く姿をさらによく見かけるようになった。
負担が大きくなったのか、疲れに肩を落としていた。
そんな彼女を見かねて、弟子の何人かがプシュケリアの施術をしたことがある。
悪魔が来る前から、弟子達は召使い達にプシュケリアを分け与えていた。
女が男にみだりに触れられるのは好ましからざることだったが、師は召使い達を慮ってそれを許していた。
私はその行為について普段は特に言及しないのだが、悪魔に触ろうとする弟子達を見て「やめろ」と警告した。が、聞き入れられなかった。

その弟子達は例外なく、癒すどころか触れた途端に手を引っ込めてしまう。

熱しすぎた湯瓶に触れて反射的に手を離すように。

「仕方ない。先生は別格だ」

と悪魔が困惑する弟子達に笑う。
弟子達は師のプシュケリアの偉大さを改めて実感するが、それ以上に悪魔の娘に対し、言い知れぬ恐れを抱いていった。

「きみはあの娘に触れたことがあるか？　アロトロバ？」

寝床で弟子のひとりに訊かれたことがある。私は首を横に振った。

「ない。きみは、触ったのか」

「昼間、水汲みに難儀していたのを手伝ってやった。疲れているようだったから、先生とまではいかないが少しはましだろうと思って…」

「プシュケリアを与えようとしたのか」

「ああ。だが触った瞬間、今まで感じたことのないものが指先に走った。なんと言えばいいのか、手を通して私の中の全部が吸い取られるような…」

「きみのプシュケリアが喰われそうになったんだ」

「恐怖したよ。いつの間にか自分が狼の口に手を突っ込んでいると知ったような、気持ちの悪い恐怖だよ」

私も同感だった。

私はこのことを、私をプシュケリアの門弟に誘った例の友人に手紙で知らせた。

友人は師のもとを離れ、プシュケリアの霊薬を研究していた。

プシュケリアを薬のように煎じて調合することができれば、我々のような修行をすることなく多くの人々のプシュケリアを助けることができる。

師は彼の考えに大いに賛同し、知人の薬師や錬金術師に紹介状を書いて送り出した。

彼はその研究を熱心に取り組み、いくつかの物質を組み合わせると、本来は微弱な非生命のプシュケリアが増幅することを発見したらしい。

この発見がどのように役立つのかは分からないが、師の邸で起きていることを考えれば、何であろうと頼るべきだった。

悪魔がどれだけ疲労しているように見えても、もはや弟子の誰一人

として、悪魔を癒そうとしたり、助けようとはしなかった。
師を除いて。

「先生よ、なぜお前はこんなことをしている？」

師が町外れの歩けぬ病人の家から帰る途中、悪魔がそう尋ねた。
師の邸に来られない者にも、師は自ら足を運んでプシュケリアの施しを与えていた。
たいてい供に私を連れるのだが、悪魔を拾ってからはこの娘も連れていくようになった。

「プシュケリアとか呼んでるものを他の奴に与えている姿しか、私は見ていない。他人に何かすること以外、お前がすることはないのか？」
「ない」

師を冒涜する悪魔の言葉に、しかし師は俄然と応える。

「これが私に与えられた使命だと、私は思ったからだ」
「誰に与えられたって？」
「我々を生み出す大いなる原理を創りし方」

師は悪魔の問答に応える。悪魔は邸の外に出ると、このようにして師を惑わせる多くの言葉を吐いた。
私はそれを傍らで聞いて腸が煮えくりそうになるのだが、師はどこまでも真摯に言葉を返す。

「私やお前にこの力を与えたのは、そいつか？　原理か？」
「それは分からない」
「ならどうしてそれを使命だと思う？　使命だと言われていないもの

が使命なら、私が人間を吸い取ることも使命なのか？」
「それも私には分からない。なぜこの世には、健やかな者と病める者、幸いなるものと不幸なる者がいるのか、と同じだ」

大通りを歩くと、通りかかる多くの者が師に手を振ったり、頭を下げたりした。師に癒された者、家族や友人を癒された者、師を尊敬する者。

師はその者たちに穏やかな表情で応え、悪魔は恭しく師の後ろを歩く。まるで一介の忠実な下僕であるかのように。

傍から見れば平和な我らだが、悪魔は言葉の端々に憎悪を滲ませ、師に問い詰めるのだ。

「全てその原理の仕業だというなら、この世を作った誰かの思し召しだと思わないか？」
「それは井戸を探さず、雨が降るのを待つようなものだ。行えることを行わず、全てをあの方のせいにしてはいけない」
「それはお前が敬われる術をたまたま持ってたから言えることだ。お前は尊ばれ、私は殺される」
「違う」

「どう違う。私は殺す為に生まれたのか？　殺される為に生まれたのか？」
「違うのだ、娘よ」

師は言われた

「私に会う為に、生き長らえてきたのだ」

師は振り返る。
そして悪魔の手を取り、まっすぐに顔を見詰めて言った。

「お前はもう、殺すことも殺されることもない。少なくとも、私の生きている間は」

だから、と師は言い重ねる。

「だから娘よ。私の生きている間は、私の側を離れるな」

召使いがさらに減り、邸の中の生活に深刻な支障が出始めた。

「召使い達の仕事をお前達もしなさい。これも修行だ」

師は弟子達にそう指示した。実際新しく召使いを雇ってもすぐ辞めてしまうので、弟子達で分担するしかなかった。

男の弟子達と女の召使い達が混ざって生活する光景は珍しく、意外にもうまく遣り繰りできた。

というのも、何か手を抜くと悪魔の娘が手伝いに来てしまうからだ。

男も女も、悪魔に近付きたくなかった。手伝わせて一緒にいるくらいなら、自分だけでやりこなした方が良い。それが邸の者たちの共通意識だった。

そんな次第だったので、召使いのはずの悪魔は、仕事を任されることがなくなった。

食事の席にも姿を現さず、寝床もいつの間にかがらくたを詰め込んだ埃臭い物置小屋に移っていた。

誰も悪魔の相手をせず、皆で悪魔を遠ざけた。

師を除いて。

師は一日の終わりにプシュケリアの施しを召し使い全員にする。
これは弟子達がするのとは訳が違い、誰も咎める者などいなかった。そもそも訪れる病人を男女で分けはしないのだから当然だった。
そうした召使い達への施術を、師はあの悪魔の娘にも行った。それも特段時間を掛けて、大量のプシュケリアを与えていた。

病人達と同じように中庭で召使いにプシュケリアの術を掛けるだが、悪魔がやってくるのは全員が去ってからだ。
弟子や召使い達は寝屋に戻り、師がひとり中庭に残った頃、悪魔は闇夜の中から姿を現す。
私は師が心配になり、物陰からそれをよく見ていた。

「野獣でも飼ってるつもりか？　先生よ」

縁側に腰掛け、師の手を背中で受け止めながら悪魔が笑う。

「結局はこうなる。どこに居着こうと、誰に拾われようと」
「お前の本意ではない」
「私の心の意がどうであろうと、だからなんだと言うんだ？」

悪魔は笑い続ける。

「私は人間を食べるしかなくて、だから人間は私を遠ざけるしかない。これのどこに心を挟む余地がある？」
「生まれたときからそうなのか」
「別に赤子の頃からこうだったわけじゃない。最初は普通に、他の連中と同じものを同じ量だけ食べてたさ。だが、どんどんただの食い物は腹に入らなくなっていった」

「お前のプシュケリアが弱っていたのだ」
「だからなんだ。そうかもしれないし、そうでないかもしれない。その頃に先生がいたらどうにかなったかもしれないし、先生でもどうしようもなかったかもしれない。今となってはどうでもいい」

悪魔は師から離れ、中庭を歩く。

「先生は、私をどこかに放り出すべきだ」
「なぜだ？」
「私に使うその力を別の奴に使えば、もっとたくさんの意義を実らせられる」
「そしてお前は生きるために他の人間からプシュケリアを吸い取る。私はその者にプシュケリアを与えて癒す。ならば私からプシュケリアを吸うこともさして変わらない」

師の言葉に、悪魔は首を横に振った。

「今はまだ、人間ひとりを死に至らしめるほど吸わなくていい。そこまでは要らない。だから先生でも治せる。今は、な」
「これからはどうなる？」
「言っただろう？　歳を重ねるごとに、必要な量がどんどん強くなるんだ。ある年齢で止まるかもしれないが、今はそんな気配がない」

悪魔は言った。

「先生でさえ食い尽くすかもしれない。普通の人間なら、どれだけ殺して回ればいいのか分からない」

師は悪魔を見詰めている。悪魔は小さな背中を向け、顔を師に見せなかった。
悪魔が背中で告げる。「私は人間じゃない」

「餓え続けながら喰い殺し、喰い殺し続けながら飢えていく、ただの獣だ」
「獣とは語り合えない」
師は応えた。
「語りかけることは出来ても、語り返すことはない。それゆえお前は獣ではない」
途端、悪魔が振り返る。火花のような妖しい眼差しで、微笑みを向ける。
「なら、先生が獣かもしれないな」
「なるほど」
師が笑う。
「なるほど、確かに」
楽しげに。心からおかしそうに、師は笑った。
師は悪魔とだけ談笑する。
私はその笑声が途方もなく不安だった。師の笑い声を耳にすると、いつも怖くなってその場から逃げ出すのだ。
悪魔といるときの師は、私達の知る師ではない。
それは悪魔と初めて出会ったときから、私だけは知っていた。
師は悪魔に打ち勝ってなどいない。悪魔に取り憑かれている。私

はおかしくなりそうだった。

なにもかもがおかしくなっていった。

プシュケリアの霊薬を研究していた友人から、試作の薬品が出来たという知らせが届いた。

弱っていた家畜をその薬でたちまち癒すことができたという。

私は大急ぎで、その薬の作り方を送るよう頼んだ。まだ実験回数が足らず検証も不完全だというが、もはやそれを問うている場合ではなかった。

師が、悪魔に抗えなくなっていたのだ。

悪魔に分け与えているプシュケリアの量は、私の想像を超えていた。

私の知る限り、師があれだけ長い時間ひとりの患者に触れ続けるということはかつて無かった。

師の邸まで来られない重病人でさえ、師はもっと短い時間で相手のプシュケリアを正常にさせてきた。

たとえその者のプシュケリア自体が弱っていても、師の与えられたプシュケリアが代わりに患者の生命をしばらくは支えてくれる。それだけの力が師にはあった。

だというのに、悪魔は一度の施術で誰よりも多くのプシュケリアを

注がれていた。しかもそれを毎日である。

これにより、師が一日に消費するプシュケリアの量は、今までとは比較にならないほど増加してしまった。

師の顔色や体調が日に日に悪くなっていく。

師の負担を減らす為、それほど深刻でない患者は弟子達が担当した。師に弟子達が総出でプシュケリアを分け与えるという、それまであり得なかったことまでした。師のために長老達が様々な妙薬を仕入れてきてくれた。

それでも焼け石に水だった。

師が、倒れた。

第５話

あれほど豊潤だった師のプシュケリアが日々弱まっていくのを、誰も止められなかった。
そんな体でも、師はプシュケリアの治療をやめなかったからだ。
師は変わらず来る者を癒した。貧しい子供も、老いた者も、難病にかかった者も、言葉の通じない異邦人も。
あの悪魔も。
もはや召使い達への施しはなされなかった。日が暮れる前には門を閉め、弟子達が師を強引に寝床へ連れて行くようになった。
それでも師の衰弱は止まらない。弱った師のプシュケリアは、触れていなくても悪魔の魔力に抗えず吸い取られていく。
悪魔を拾った廃屋の中で、私のプシュケリアが屈服したように。

「先生、あの娘を街の外に追放して下さい」

こうなった以上、私を含んだ弟子達は悪魔を放逐するよう師に進言しないわけにはいかなかった。

「先生、お願いです。あの娘が先生のプシュケリアを奪っているのです」
「あの娘が来てから、何もかもがおかしくなりました」
「死んでは元も子もないと仰ったじゃありませんか、先生」

先生、先生、と弟子達は口々に懇願する。
だが師は首を横に振った。

「私が生きる代わりに、あの娘が死ぬ。それでも良いのか」

弟子達は憤った。

「先生はご自分の価値を分かっておられない。なぜ先生が、あの娘のために死ななければならないのですか？」

「私はいつか死ぬ。いつかプシュケリアが尽きる。それが今になっているだけなのだ」

「そんなことはない！　あの娘さえいなければ……！」

「そうです！　師よ、あなたはあんな害悪の娘のために、もっと多くの善良な人々を見捨てるのですか！」

「先生、師よ、どちらが世のためかお考え下さい！」

しかし師はやはり、首を横に振る。

「今、私はあの娘をここで養うことで、あの娘に奪われそうなプシュケリアを救っている。あの娘を放逐すれば、またどこかで誰かが襲われるだろう」

師は細くなった体でも、変わらず岩のように頑として応えた。

弟子の中で嗚咽に崩れる者が出た。彼は嘆き、願う。

「先生、どうかお願いです。せめてプシュケリアの治療は制限させて下さい。先生の治療が必要な者のみにしてください」

「その裁量は誰が行う？」

「我ら弟子達が」

「ならば弟子達よ。私の門を叩いた瀕死の者を、お前達はどう裁く？」

「門の中に迎え入れます」

「その者が殺人者だとしたら？」

「門の外に追い出します」

「なぜだ？」

「罪人です。警吏に引き渡すべきです」

「引き渡す前に死ぬぞ」

「何が言いたいのですか。重罪人を癒せと仰るのですか」
「そうだ」

師ははっきり言った。弟子達は絶句するしかなかった。
唖然とする弟子達に、師がはっきり告げる。

「プシュケリアの徒が、プシュケリアの困窮を見捨ててはならない。プシュケリアに善悪も功罪もないのだから」
「…だからなのですか？」

弟子達のひとりが、震える声で問いかける。

「だから、あの汚らわしい娘を、あなたは救おうというのですか？」
「そうだ」
「師よ、あなたは狂われたのか！」

弟子達は叫ぶ。
しかし、師は険しい顔を横に振るだけだった。

「弟子達よ。お前達の見るものが、私には見えない。私の見るものが、お前達には見えない」

師は静かに言われた。

「私はプシュケリアを見ている。プシュケリアの困窮の喘ぎを聞いている。そして、それはあの娘も同じなのだ」

その声はどこまでも静かに、しかし悲しさを隠しきれない響きをしていた。

私はそれ以上そこにいることができず、中庭に飛び出してしまった。

夜の中庭は、誰もいない。ひたすらに静かだった。街は師の衰弱で活気を失っていた。誰もが師のことを思い遣っているのに、師はそれを聞き入れてくれない。

悪魔のせいで。

「お前達の師匠は不幸だ。私に取り憑かれた」

その声に、私は振り返る。

誰もいないと思われた中庭の隅に、あの娘が佇んでいた。夜と闇こそが友とでも言うように、灯りのない縁側に腰掛けている。

「お前達は不幸だ。この私に取り憑かれた」

魔物が笑う。嘲りではない、嘘のような優しい微笑。

私はその混じりけのない笑みに、怒りを覚えた。拳が震える。

「…お前など、家畜の餌か、畑の肥やしにでもなれば良い」

悪魔に近づく。

恐れなどどこにもなかった。恐怖よりも憎悪が優った。悪魔は動かず、逃げず、私をじっと見詰めた。

「お前は生き続けるより、死ぬ方が良い」

「私もそう思う」

「なら何故今すぐ死なない！」

私は激情のまま、悪魔の胸ぐらを掴み、引きずりあげる。その体は驚くほど軽かった。
師のプシュケリアを根こそぎ吸い上げているというのに、それでさえこの悪魔の腹には溜まらない。どこまでも貪り続ける。
汚らしい悪魔。

「お前は知ってるはずだ」

だが悪魔は微笑をゆるやかにやめ、憐れむ目を私に向けた。
悪意のない眼差しをたたえた小さな顔が、私にだけ聞こえる声で言う。

「先生が、あの日、私に身を捧げたことを。あの先生は、あそこで本当に死んでも構わなかったことを。お前だけは知っているはずだ」

私は思わず息を呑む。
悪魔が私の腕を強く掴んだ。全身の力が一気に失われる。悪魔を掴み続けることが出来ず、手を離し、その場に倒れ込む。

地面に横たわった私に、悪魔がそっとしゃがみこむ。

「他の弟子達に伝えろ、アロトロバ」

悪魔は私の耳元で囁く。

その表情には、もう何も浮かんでいなかった。表情を形成する感情が悪魔にないのか、その感情を表現する表情が存在しないのか。

そんな不思議な無表情で、悪魔が告げる。
しかしその声は、私が初めて耳にする、血の通った人間らしい声だった。

「私は、先生が死ぬまでここにいる。先生を食い終えたら、またどこかに流れていく」

必死、決意、強さと弱さを織り交ぜた声。

まるで年端もいかない少女のようだった。見た目通りの。

「先生の代わりに私に食われる者を差し出せ。そうすれば私はそいつを食べて、この街を去る」

「何を、言っている…？」

「先生と他の誰か。命の選択を、弟子達に迫らせろ。私が選択を迫っていると弟子達に伝えろ」

そして悪魔は、ふっと表情を和らげる。

小さく笑んだ。

あどけない、温かく優しいうららかな面立ち。

深山を流れる泉川のように涼やかな眼差し。

私は思わず全てを忘れ、その表情に魅入ってしまった。

まるで何も悪いことなど起きていないような、幻想的なまでに、悪魔の姿は美しかった。

「お前は伝えるだけでいい。あとは、全部うまくいく」

それだけ言うと、動けない私を尻目に、悪魔は闇の中に去っていった。

私は闇の中でひとり、残される。

流されていた感情が蘇り、噴き上がる。しかしそれは何故か怒りで

はなく、悲しみだった。ひたすらに悲しかった。

プシュケリアが欲しい。弱々しくなった私のプシュケリアを助けてくれる、誰かのプシュケリアが。

他人のプシュケリアが。

師のプシュケリアが。

プシュケリアを、手に入れなくてはならない。

師のためにも。私のためにも。

翌日の朝。

街の外の荒れ野で。

悪魔の死体が見つかった。

第6話

結局私は仲間の弟子達に、悪魔の言ったことを伝えた。
悪魔の言葉を聞き終えた弟子達の目は暗く、歪みに歪んでいた。そして弟子達は互いに顔を見合わせ、そのか黒い輝きをさらに深めていった。

誰かがぽつりとこぼす。

「悪魔を殺そう」

応える声はなかった。が、全員の双眸と表情が、それを肯定していた。

私は訊いた。

「師には、なんと言う?」

「そのままだ。悪魔は我々を殺そうとした。だから殺した」

弟子のひとりが応え、皆が頷く。私はそれ以上なにも問いかけることが出来なかった。

その後の詳しいことは、私にも分からない。

夜の更けた時間に、悪魔が塒にしている物置小屋を弟子達が息を殺して押しかけたこと。

彼らの手に家畜を捌く為の道具があったこと。

――――それから少しして、邸を満たしていたあの魔性の気配が不意に途絶えたこと。

弟子達が物置小屋から何かを運び出していること。
それを邸の外へ運んでいったこと。
私が知っているのは、それだけだった。

悪魔の死体を見つけたのは街の近くに住む牧童で、荒野にぽつんと転がっている塊を発見した。
最初はそれが人間だと思わなかったらしい。近づいて何かの肉塊だと分かったが、獣の死骸だろうと思ったそうだ。
かろうじて形の残っていた部位から、その死骸が人間のものだとようやく悟り、街に知らせに来たという。

死体の損壊は激しかった。

頭を潰され、喉を裂かれ、胸を切り開かれ、腹を抉られ、手足はもがれ、指という指は寸断された上で胴体に押し固められ、臓物の類は取り除かれ、もぎ取られた四肢が内臓のあった場所に纏めて押し込まれていた。

もはやただの肉塊だった。

獣の仕業ではない。明らかに人間が人間を肉塊にしたのだ。
それをなぜ悪魔の娘だと分かったのか。

無惨な死体が発見されたという話が街に広がった時、

「それは私の召使いの娘だ」

と言った人物がいたからだ。

無論、我らの師である。

痩せ細った体のどこにそんな力が残っていたのか、師は私の肩を借りて皆の前に姿を現した。

師は言った。

「弔わせて欲しい。私の手で」

私は悲しかった。これほど師と触れ合っているというのに、師のプシュケリアが感じられない。

私がいくら師にプシュケリアを注いでも、師のプシュケリアは応えてくれない。プシュケリアが衰弱しきっているのだ。

師のそんな体で葬儀など出来るわけがなかった。しかし止めても師は無理矢理執り行うだろう。

だから私は師に言った。

「先生、お願いです。どうか私に手伝わせて下さい」

悪魔の死体は街の共同墓地に葬った。師と私、数名の僧侶見習い達で。

弟子達はひとりも手伝わなかった。

小さな墓標が出来て、寺の御僧が全ての儀式を終えた後、師はその場に残った。私も側にいた。

「…私は無力だ」

師がぽつりと呟く。

「あの娘の飢えも苦しみも、癒すことは出来なかった」

私は首を横に振る。

「あの娘は死ぬ気でした。あの娘が自分で死を選んだのです。自分を殺させるよう、我々をけしかけたのです」

私は師にあの夜のことを話した。師は沈痛な面立ちで聞き、

「彼女は私との契約を守った。この街に来て、あの娘は私しか食べていない」

「先生、分かっているはずです。あの娘は死ぬしかありませんでした」

師はやはり、首を横に振って返す。

「彼女のプシュケリア私に助けを求めていた」

「あの娘は一言も助けを請うてはいませんでした」

「そうだろう。契約を願ったのは私なのだから。私はプシュケリアを救う為にこの力を授かった。だというのに…」

私は悲しかった。

悪魔が死んで悲しいのではない。

師のことが分からない。

師の見ているものが見えない。師は、私の見ているものを見てくれない。

師は、私を見てくれない。

「先生。プシュケリアとはなんですか？　あの娘は、結局なんだったのですか？」

師は応えた。

「アロトロバ、伝えるのだ。プシュケリアとは、この世界の全てに充ちるもの」

師は言われる。

「天地万物にプシュケリアは宿る。人の目に見えぬものにもプシュケリアは宿る。砂の重さの中にもプシュケリアは宿る。鉄が錆になる力の中にもプシュケリアは宿る。音の中にも、光の中にも」

「先生には、プシュケリアが見えるのですね？　私達には見えないものが、あなたには見えているのですね？」

「そうだ」

「では、あの娘にも、見えていたのですか？」

「そうだ」

「あなたがたは…」

私は震える声で問うた。

「あなたがたは、なんなのですか？」

「見えぬものを視て、聞こえぬものを聴く、ただの人間だ」

師は応えられた。

「我々はこの世界を統べる真の理法に、僅かばかり身を近く寄せる者。それ故に、天上の偉大なる方の御業を、プシュケリアを通して世にあまねく教え広める者」

師は言った。

「我らはプシュケリアの徒である」

私はその言葉に、頷くことは出来なかった。

「先生は、あの娘を弟子と思っていたのですか？」

「違う。師弟ではない。私の術を彼女は理解出来ず、私も彼女の術を真似することなど出来なかった」

「では、あなた方の関係はなんなのですか？」

師はすぐに言葉を返さなかった。

ただ、じっと小さな墓標を眺めていた。名前以外、何も刻まれていない簡素な石塊。

その石にもプシュケリアはあった。しかし無生物のプシュケリアは弱すぎて、人間が感じ取ることは出来ない。

だが今の師は、その石の微弱なプシュケリアこそ、悪魔のプシュケリアの残滓だとでも言うように向き合っていた。

否、もしかしたら私が感じ取れないだけで、師は石のプシュケリアさえ感じ取れるのではないだろうか。

もしそうだとすれば、師の感じ取っている世界は、我々とは大いに異なるのではなかろうか。

師は、我々とは違う。

「……私は、彼女を仲間と呼びたかった」

「先生」

私は居ても立ってもいられず、叫ぶように呼びかけた。「先生」

「私達は仲間ではないのですか。あなたの弟子達は、あなたの教えに耳を傾け、あなたの教えを守る、同じプシュケリアの徒です」
「アロトロバ…」
「私達は日々、あなたのようになるよう心掛けてきました。たとえあなたのプシュケリアには遠く及ばずとも、あなたのように、と思い願って修行していました。だというのに、あなたは」

喉が震え、体が震え、魂が震える。

プシュケリアが泣く。

「あなたは、あなたを慕う者達に距離を取り、あなたを喰い殺す者に心を開く。私達はどうすれば良いのですか」

言葉をいくら重ねても、胸の内で逆巻くプシュケリアを表現しきれない。
そんな私のプシュケリアを、師は感じ取れるのだろうか。
感じ取って欲しいと、私は願う。

「先生、教えて下さい。どうすれば、あなたの心に近づけるのか。先生」

風が流れる。無人の墓地に、乾いた風が。間もなく昼になろうというのに寺院の裏手に広がる共同墓地はいたって静かで、賑やかしに浸った街の喧騒が遠い。
そんな人為の空隙で、師がぽつりと呟く。

「――――私のようになりたいか、アロトロバ」

師は、やはり私に背を向けたまま言った。私はその言葉に頷く。師には見えないだろうが、私は構わなかった。おそらく師も構わなかっ

ただろう。
師は私に言う。
「私のようになりたければ、アロトロバ、しばし待つのだ。お前の兄弟子からの便りが届くまで」
何のことかと尋ねそうになる私を制しながら、師は立ち上がる。その重みを感じない師の動きに、私は恐れを憶えた。
師は重ねて言った。
「さすれば、天より定められたプシュケリアを超えるプシュケリアを、お前は得ることが出来るだろう」
「いったい、なんのことですか？」
「待て。そうすれば、お前の願いは叶う」

第7話

目の前に、その灰色の薬があった。
それを前にして、私の心は言葉なくさざめいてしまう。

私の兄弟子にして友人から、件の試薬がついに届いたのだ。
師の体は弟子達の甲斐甲斐しい介護もあり、悪魔がいた頃の絶望的な衰弱は治まっていた。
しかし弟子達が入れ替わり立ち替わりプシュケリアを分け与えても、師のプシュケリアを正常に戻すことは出来なかった。
失われたプシュケリアの量はそれほどまでに多かったのだ。
いかにあの悪魔が師を蝕んでいたのか、弟子達はいやでも理解できた。そして自分たちのしたことに間違いはなかったと日々確信していった。
師は結局、弟子達に何も問いはしなかった。
悪魔がいなくなったあの夜のことも、一切言及しなかった。
師の邸は変わらず病人たちが並んでいた。師の代わりに弟子達がプシュケリアの術を施した。当然、師ほどの効果は見られない。それに文句を言う者はひとりもいなかった。誰もが、師の快復を待ち望んでいた。
私の友人もそのひとりだった。
彼は出来るなら師のところへ飛んで帰りたいと手紙を添えてきた。いずこかの土地で無くてはならぬ身になった友人から、例のプシュケリアを癒す薬がとうとう送られてきた。

それは灰白色の粉薬だった。
小麦粉と石灰を混ぜ合わせ、そこに銀粉を薄く練り込ませたような見た目をしている。軽そうに見えるが、比重は意外に重い。無臭だった。

「これが、薬…？」

私は机の上に広げたそれを前にして、何か危ういものを覚えた。うまく説明しきれない感覚的な警鐘が、私の中に鳴り響く。

何かに似ているのだ。だがそれを思い出せない。もどかしい感情を誤魔化すため、私は友人からの手紙をさらに読み込む。

手紙には薬の用法だけでなく、製造方法まで記されていた。おそらくこの街でもなんとか作れそうだと踏んだ私は、この薬を誰かに話すべきか悩んだ。

他の弟子達に話せば、実績のない薬を師に施すなど論外だと攻撃されるだろう。今度は私が肉塊にされかねない。ということは、やはり師以外には口外しない方が良いのか。

相談する相手がとぼしいなと悩んでいると、ふと、あの悪魔なら何と言うだろう、と思ってしまう。

「馬鹿な」

独りでこぼし、自嘲する。あの悪魔のせいで、このようなことになっているというのに、その張本人に相談できていれば、などと。あまりに愚昧で我ながら呆れてしまう。

だが、師と同じ位置で、師と対等に問答ができたのは、あの娘だけだった。

最後に見た、あの澄み切った清らかな微笑を思い出す。

そして激しく首を振ってその残像を振り払った。まやかしだ。悪魔の術に他ならない。

「やはりあの娘は悪魔だった」

口に出して言葉にし、自分へ強く言い聞かせる。

悪魔の呪いに屈してはならない。師を助けることが第一なのだ。あの悪魔の呪いを解いて差し上げねば。
不意に、私はこの灰色の薬を前にした危機感が、何に似ているのか気付いてしまった。

あの悪魔だ。

あれと初めて出会い、廃墟の床に這いずらなければならなくなったときと同じものを、魂が感じているのだ。
これは、本当に人間が口にして良いものなのか。プシュケリアを毒すものではないのか。
私には判断出来なかった。決められるのは師だけだった。そして師に問答出来る者は、もういないのだった。

「ありがたく頂戴しよう」

師は寸分の迷いもなく私に言った。

「しかし先生、これが本当にプシュケリアを癒してくれる代物なのか、まだ確証できていません」
「ならば私が確かめよう」

と師は「用意しなさい、アロトロバ」と私に命じる。そう言われれば私は従うしかない。

用法通り定量の粉剤を白湯へ溶かし、少し冷ましていると、不思議な感触を覚える。私のプシュケリアに、誰かが触れているような気がしてくるのだ。
皮膚の下を、見えない何かが撫でる感覚。

不可視の手がやはり不可視の血流を弄ぶ錯覚。

「…っ！」

私は思わず薬湯から身を引いてしまう。

なぜその薬だと思ったのかは自分でも分からない。何かを感じ取ったのは私ではなく、正確には私のプシュケリアだ。プシュケリアが警告を発したのだ。

やはりこの薬は何かがおかしい。

無機物を触って自分のプシュケリアが呼応するなど未だかつてなかった。

しかもこれは、どちらかと言えば、薬の方から私のプシュケリアに呼びかけてきたような……

「恐れるな、アロトロバ」

戦いている私に、師が静かに言う。穏やかな微笑を浮かべ、

「それは戯れたいだけだ」

何かを見知ったように告げる。もちろん私にはなんのことか分からない。

「先生は、この薬を知っていたのですか？」

「それを作った彼の者から相談を受けていた。お前と似たようなものを、自分の作ったものから感じ取っていたのだ」

「これは、なんなのですか？」

「安心するのだ。確かに、プシュケリアは癒される」

薬を、と師は私に促す。私は恐る恐る、しかし師が取りこぼさぬよう気をつけながら、その薬湯を手渡した。

師はそれを少しずつ口に含み、しばしの時間を掛けて全て飲み干し

た。空になった器を私に返すと、師は寝床に横になった。

「……正確に言えば」

体を休めながら、師は口を開く。

「正確に言えば、この薬自体には、さしたるプシュケリアは宿っていない。そのあたりの路傍の石と変わらん」

しかし、と師は言われる。

「この薬を通してプシュケリアをもたらす者達がいる」

私ははっと顔を師に向ける。師は「残りの薬を持って来なさい」と私に言う。

油紙に包まれた残りの粉薬を言われた通り師に渡すと、師は包みを開けながら言葉を続けた。

「その者達は自身の潤沢なプシュケリアを服用者にもたらしてくれるが、その代わり、服用者へあることを要求する」

「なにをです？」

「此処で戯れさせよ、だ」

師が言われた瞬間、

粉末が宙に舞った。

「……！」

驚く私の前で、灰銀色の粉が勝手に空中へ立ち昇り、千切れる。幾つも幾つも枝分かれし、てんでばらばらの方向に伸びていく。

あるものは蛇のようにうねり、あるものは矢のように直進し、あるものは螺旋を描く。そして動きながら崩壊し、瞬く間に集まってまた復活し、別の動き方で再開した。
こういった複雑な運動と集散を恐ろしい速度で繰り返す粉末に、私は声も出せなかった。
その粉は、まるで何かの生き物だった。自在に形を変えられる不定形の体であり、何もかもをどこまでも掴める無数の手を備えている。
唖然とする私とは対照的に、師はいつも通りの穏やかさだった。常ならそれは私を安心させてくれる篝火であるのに、今に限っては、何を意味するのか分からない妖しい鬼火であった。
そんなことを思っていると、灰色の粉末が一部を薄く長く伸ばし、私へその先端を差し向けてきた。
反射的に後ずさる私に、

「動くな、アロトロバ」

師は静やかに言う。私は動けなくなった。
体の周囲を粉が舞う。
粉末の全体量はたいしたことがない。それを薄く広く伸ばしているので、よく注意しなければ見落としてしまうだろう。

だというのに、その細かい粒子達は尋常ならざる存在感を放出している。
目には見えない大熊が私の背後に立ち、その獣の匂いと気配だけで生命の危機を感じ取れるように。
薄っぺらい灰白色の粉に、いかなる猛獣より驚異的な何かが宿っている。間違いなく。

「恐れるな、アロトロバ」

僅かばかり前に口にされた言葉を、師は再び繰り返す。

「この程度の量なら悪さは出来ない。あの粉末の量が多ければ多いほど力は大きくなるが、この状態では軽すぎて舞い遊ぶことしか出来ん」

「で、では先生。『これ』は私に何をしようとしているのですか？」

空中に流れては跳び、踊り、また流れる粉状のもの。

それは私の周囲を完全に取り囲み、渦を巻いて流動している。明らかに私を認識し、何かをしようとしていた。

師はやや困ったような表情を浮かべ、言う。

「一服しないか、と誘っているのだ」

「は？」

「服用を勧めている。この薬を」

私は二の句が継げなくなった。

私がこの薬を？　なぜ？

明らかに動揺する私の周りで、灰色の流れが小さく震える。まるで竦み怯んだ私を面白がるように。

「…どうすれば良いのです、先生？」

「私に飲ませた程度の量であれば、一度の服用で肉体に悪影響が出ることはない」

と師は断言する。私はその確固たる言葉に安堵した。が、

「しかしその薬を飲めば、今ここに粉を借りて現れている者の姿を視ることになる」

「……」
「この者の姿を視ること、この者の声を聴くこと、この者と触れ合うこと。それがこの者の望みだ」
師は淡々と言った。私は震える体と乾ききった喉から言葉を絞り出し、訊く。
「師は、いえ、師とあの悪魔は、この者が見えていたのですね？」
「そうだ。この者達を見ていた」
「どうやって…？」
「それは私にも分からない。気付けば見えていた。これは天に坐すあの方の御意志だと、私は思った」
「…この薬を飲めば、あなたと同じものが見られると？」
「そうだ」
師は言い切る。それでいて、
「断っても良い。お前に害は加えさせない。お前が断ればそれで済む」
と安心させるように微笑んだ。私のよく知る、師の暖かな笑顔だった。
そう、この表情だ。
この温もりが欲しかった。
プシュケリアの徒として同じ屋根の下で修行と治療に努め、同じ食事をし、共に暮らした。
師がおり、弟子仲間がいて、召使い達が働き、病人達が分け隔てなく並び、役人も僧侶も商人も牧童も訪れる。
悪魔に奪われる前の、我々の家。

私は、それを取り戻したかった。

もう悪魔はいない。

取り戻したのだ。

だから、私がこの薬を飲む必要などなかった。師の言葉に偽りはないだろう。服用を断ることで私が被る害などない。服用した場合の危険の方が断然大きかった。

私が飲む必要などないのだ。

必要ない。

必要ないのだ。

…しかし。

「飲ませてください、先生」

私は目を強く閉じながら、師に嘆願した。

肉体の中心を流れるプシュケリアが、金切り声をあげて抗議する。全身が震えて萎縮し、膝が今にも崩れ落ちそうだった。

そうやって力をなくしそうになる肉体と精神を、私は叱咤する。あの悪魔を思い出せ。確かに目の前の何者かは恐ろしいが、あの悪魔ほどではない。

私から何もかも奪おうとした、あの悪魔よりは。

「先生、お願いします」

私は言う。声は震えていたかもしれない。震えていなかったかもしれない。分からない。

だが師は少しだけ目を伏せ、しばし黙して、ついに、

「…分かった」

と言った。

「目を閉じ、口を開けなさい」

師の言葉に従い、目を瞑りながら唇を開く。
視覚が閉ざされると、私を囲む何者かの気配がより強く感じ取れた。その気配が色めいているのが分かる。私が要求を呑んだと知って歓びに波打つ。はしゃいでいるかのよう。

まるで小児だ。

そう思ってしまったせいだろうか、暗闇の視界の中で、私はあの悪魔の姿を思い浮かべていた。
子供の姿をした魔物。悪鬼。人間ではない。恐らくこの目に見えない怪物達の仲間なのだ。人間ではない。もし人間であるなら、

私の脳裏で、これほど美しい姿になるはずがない。
なんの辛みも恨みもない、あの清水のような微笑みを浮かべているはずがない。

この世で私しか知らない笑みの貌。
師さえ知らない、あの娘の最期のかんばせ。

うつくしかった。

「――――っ！」

不意に、口の中を何かが潜り込む。

粉末状のあの者が私に入り始めたのだと理解する前に、体が異物を排除しようと咳き込む。だが侵入者は口の中のあらゆる場所にへばりつき、粘膜の上を這い上がり、執拗に喉の奥へ進み続ける。
肉体と侵入者の戦いは激しく、その影響で私は呼吸することも立っていることも出来なくなった。私が床に倒れ込んでしまっても、口の中の攻防は続いていく。

そしてついに、体が粉薬を押し戻せなくなった。私の胃の中へそれは進出を果たす。

胃に何かが到達したのを感じた瞬間、感覚が急激に鈍っていく。
閉じた視覚はもとより、聴覚も嗅覚も、触覚さえも曖昧になる。私はそのあまりに急な変化に恐怖したが、声を出す力も振り絞れなかった。体を動かす力どころか、肉体を持っているという感覚そのものが希薄になっていた。
その状態がどれほど続いたろう。私にそれを計る術はなかった。
ただ遠くから、目を開けなさい、という響きが届いてきて、それで感覚が戻っているのかと悟れた。私は初めて瞼を動かすかのような違和感の中、目を開ける。

世界の色が、崩壊していた。

師の寝室であったはずだが、それを認識することが私には出来なかった。椅子や机らしきものは確かに見えるのだが、それらの輪郭を上塗りするように、空間が様々な色で満たされていた。
空気が色を持っている。しかもその色は一定ではなく、七色それぞれが細かく濃度を変えて混ざり合い、無数の色彩を蠢かせていた。

屋内に置かれた物体の全てが、空気と同様に色を様々に変化させ、ある色で固定されるということがない。
そのせいで物体と物体の境目が曖昧になっている。どこからどこ

までが何なのか判別できない。じっと目を凝らして輪郭をつかみかけるも、すぐに複雑な変色に押し流される。目を開いているというのに、目を閉じているのと変わらない。

ここは一体どこなのだ。

「ようこそ、アロトロバ。人智の理法が統べる世界の、ほんの外側へ」

師の声が聞こえる。しかし場所が分からない。四方から声が伝わっているように思える。

「先生、これは、なんなのですか…？」

自分の声さえ体の外から聞こえてくるように感じた。肉体の実感が薄い。

「ここは…異界、なのですか？」

「違う。偉大なるあの御方が創造なさった、我々の生きる世界だ。しかし人間が見たり聞いたり出来る範囲の外にも、この世界は広がっている」

師の声が届く。その声はまるで複数人から発せられるように、ひどく音割れしていた。

その声で師は言う。

「彼らは人間の領域の外に棲んでいる、同じ創造主から造られた生き物だ」

「…生き物？」

「だが感覚の領域が異なりすぎて、人間は彼らを感じ取れない。彼らも人間を感じ取れない。互いに見えないのだ、通常は」

「…先生は、この世界が見えていたのですね？　この世界が見える代償に、我々の世界が見えにくくなっていたのですね？」
「そうだ」
「あの娘も…？」
「そうだ」

師は断言した。私は安堵する。うれしさのあまり笑いたかった。

ではこれで、私はあなたがたの仲間になれたのですね？

そう言おうとした。
その直前。

「我々はここを覗き見ることができる。それと同様に、彼らの中にも、こちらを覗き見る者がいる」

師が言う。ひどく悲しい声音で。

「――そして、今、彼らもお前を見つけた」

なにを、と問いかける間もなく。
それが、目に入った。

光。

何かが空間上で発光した。瞬間的に、無数の色の空気が光に貪り食われる。無色透明の光は暴虐なまでに色という色を蹴散らし、色彩という現象そのものを破壊した。

黒ではない暗闇。白ではない無色。

その奇妙きわまりない空間に、亀裂が入る。

ひび割れたその中から、無数の小さな何かが伸びてくる。

蔓草のようにも、虫の肢先のようにも見えるそれが、亀裂という亀裂全てから這い出てきた。裂け目を無理矢理押し広げるように、黒々としたひび割れの向こうから、大量の手が溢れ出た。

その勢いと量はまさに氾濫だった。音のない怒濤となって私に襲いかかってくる。

「……っ！」

私は叫び声を上げようとしたが、叶わない。

体を誰かが押さえ付けているからだ。

その誰かを、私は見やった。

白と灰と銀の荒縄を乱雑に組み合わせたような、筆舌に尽くしがたい肉体。頭も手足もなく、縄のような銀の触手をいくつも不規則に垂らし、それで私の体を束縛していた。

その銀の体のあちこちに、口腔と歯牙が生物的な法則を無視して点在している。それらの口から一斉に歯軋りが起こり、その振動が私に伝わってくる。私の魂を直接震え上がらせて。

あらがうことの出来ない恐慌に陥った私へ、銀の肉体が近づく。

その体の一部が歪み、霞んで、別の形状になった。

顔だ。

私の顔。

銀よりも白に近い色になったその部位が、目を開く。

瞳があった。不安しか覚えない、底なしに透明な金色の双眸が。

私を見ていた。

目を、合わせてしまう。

くわれる。

「――――っ!!」

全ての理屈と勇気と理知を消し飛ばし、名状しがたい圧倒的な純度の恐怖が私を襲う。

見てはいけないもの。なぜ人間がそれと違う領域で暮らしているのか。

知識も理性も意志も、暴力的なまでに納得させてしまう原始の感情が、私を破壊する。

粉々にされる私の意識が最後に捉えたのは、裂け目から溢れ出る無数の手がついに私へ到達した瞬間だった。

第８話

結局、私は二日ほど意識を無くしていた。
目を覚ましたあとは、あの不可思議な色彩もおぞましい生物も見えず、健常な世界と五感を取り戻していた。

驚くべきことに、目覚めたあとの私の肉体はかつてないほど快活になっていた。プシュケリアが溢れんばかりに漲り、病人達を今までにないほど治癒することが出来た。

そして師の具合も、私と同じく著しい向上を見せていた。数日もすると、師は完全に元のプシュケリアを回復させるに至った。

私を含む弟子達はもとより、町中の人間が師の復活を祝った。そのとき催された祝祭がどれほど盛況だったのか、私は兄弟子に感謝に感謝を重ねて手紙で報せた。

その祝祭で、主役だというのに師は宴席を抜け出し、あの墓地に佇んでいた。
師がいないと弟子達がざわめく中で探しに来た私へ、師は言った。

「お前のプシュケリアは、やがて薬の効果を失い、本来の量に戻るだろう」
「では、またあの薬を飲めば良いのですか？」
「忘れるな。それは本来、プシュケリアが困窮している者が受け取るはずのプシュケリアだ。お前を介してそれを配っているに過ぎない」
「分かっています」
「…この薬が、娘のときに間に合っていればな」

師は呟く。
その視線は、一番新しい簡素な墓標に向けられていた。
「先生。あの娘が例の生き物を捉えていたというなら、なぜそちらを喰わなかったのでしょう？」
「喰えないのだ。視ることは出来ても、互いに干渉出来ない」
「では、あの薬を飲めば？」
「例の生き物は薬を通じてプシュケリアをもたらす。あの娘は、逆に薬を通じて彼らのプシュケリアを奪うことが出来ただろう」
「…あんなものと、戦えると？」
「彼女は出来る。私には出来ない」

師は笑う。寂しそうに。

「先生…」
「アロトロバ、この薬に名前は？」

師が問いかける。私は首を横に振った。「ありません」

「作った本人から、手紙でまだ名前はないと教えられました。あの薬、のままです」
「では、私が命名しよう。救われたのだからな」

師は言われた。
何に救われたのですか、と問おうとしたが、やめた。

師は私に告げる。万感の情念を込めて。

「グラリス」

命名された。
私はうつむく。
「多くのプシュケリアが、このグラリスで救われるように」
グラリス――墓標に刻まれたその名前――を見ながら、師は言われた。
ああ、やはり。
あの悪魔は、まだ我々の中にいるのだ。
私は思い、そして、気付けば笑っていた。

（アロトロバ日記　外伝『我が師と悪魔』より）